

「台湾でこれから注目される防災用品」

歐 元韻

2020年は、1999年9月21日に台湾中部で発生した「921大地震」から20年が経過した節目の年です。政府は「台湾防災元年」のスローガンを掲げ、人々の防災意識向上に取り組んでいます。国家防災日に定められた9月21日には、各地で防災関連イベントが催され、人々の防災に対する関心度向上を図っています。

今回のレポートは、台湾の防事情をお伝えします。

＜台湾の自然環境及び災害可能性＞

台湾は、過去に地震、風水害(台風、洪水等)の自然災害による甚大な被害を被ってきました。二次災害の山崩れ、地滑り、土石流等も発生しやすく、過去には村全体が消滅したこともあります。また四方を海に囲まれているため、津波に襲われる可能性も高いです。その他にも、高齢化社会の到来、都市部への人口集中等は、災害発生時に二次・三次災害を引き起こす要因にもなり、憂慮すべき問題です。

建築物の老朽化問題も深刻です。老朽化した建物内の、古くて傷んだ電源コード等から発火する火災が、大きな社会問題となっています。内政部消防局の発表によると、今年8月に発生した建物火災531件のうち、出火原因の第1位は、電源コード等、電気設備関連のトラブルによるものです。環境の整備も今後の重要な課題です。

＜2020年国家防災日・防災教育PRイベント開催＞

国家防災日の前日の9月20日に、国父記念館中山公園広場にて防災教育PRイベントが開催されました。このイベントは、市民に防災についての考えを見直してもらう場でもあり、国を挙げての防災に対する取り組みを結集させた、画期的な防災イベントでした。会場では、IT技術を駆使したスマートフォンやタブレットのアプリケーションを用いた防災情報の配信等のPRもあり、台湾のシステム開発能力の強みを活かしたものになっていました。

会場には73のブースがあり、防災関連グッズ等の紹介の他、人名救助活動用設備、装備の紹介コーナー、レスキュー部隊用大型車も展示されており、子供達が消防車の遊具を通じて防災活動に触れるなど、楽しみながら「防災」を身近に感じ

ることのできる工夫が随所に見受けられました。

＜災害時の備蓄用食料品＞

台湾で現在注目されている防災グッズは、備蓄用食料品です。女性向けファッション雑誌「マリー・クレール(美麗佳人)台湾版」でも、日本の防災食品特集が組まれ、従来の防災食品に対するイメージを払拭するものでした。特に一部の製品は、非常食として実際に店頭やネットでも販売されており、わかめご飯、五目ご飯、ドライカレー、えびピラフなどは175元(約650円=1台湾元3.7円)から、三角おにぎりは165元(約610円)で販売されています。

その他、今回の防災イベント期間中の目立った動きとしては、台湾防災産業協会が、「防災リュック」や、あらかじめ準備・備蓄すべき各種防災用品を宣伝していました。

＜台湾での防災用品に対する見方、考え方＞

台湾は、現在防災対策の過渡期にあります。特に今年は、台湾で開発したアプリ等がコロナ禍で大変注目されたこともあり、その高い技術力を自然災害にも応用できないかと注目が集まっています。現在、人々の防災意識を高める環境や資源は徐々に整いつつありますが、いざ防災関連商品を購入するとすると、身近なスーパーやホームセンター、雑貨店などでは、専門コーナーは皆無に近い状態です。今回の防災週間をきっかけに、防災用品コーナーを設置するところも出てきましたが、商品構成はまだまだ貧弱です。

数々の災害を経験した日本製の防災商品は、強力なブランド力があります。一方、非常食の分野では、安い韓国製が市場に出回っており、80元(約300円)前後で販売されています。

欲張りな台湾の一消費者としては、安くても良い防災商品は積極的に試してみたいところです。



【防災用品コーナー】